

On the Students' Basic Knowledge of Music in Our School : Based on the First Survey

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-11-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 伊坪, 千恵, 小佐野, 実穂, 北谷, 久美子, 櫻井, 佐多子, 古市, ゆり子, 高牧, 恵里 メールアドレス: 所属:
URL	https://mu.repo.nii.ac.jp/records/639

本学学生の音楽の基礎知識について

—第1回目の調査による—

On the Students' Basic Knowledge of Music in Our School :
Based on the First Survey

伊 坪 千 恵^{*}
ITSUBO Chie

北 谷 久 美 子^{*}
KITATANI Kumiko

古 市 ゆ り 子^{*}
FURUICHI Yuriko

小 佐 野 実 穂^{*}
OSANO Miho

櫻 井 佐 多 子^{*}
SAKURAI Satako

高 牧 恵 里[†]
TAKAMAKI Eri

はじめに

本学科は、長年において保育士、幼稚園教諭、そして小学校教諭の免許を取得する学生を養成し、社会に送り出してきた。本年度に入学した学生が、保育園や幼稚園、さらに小・中・高でこれまで受けてきた歌唱教育や楽器に触れる音楽教育の中で、音楽の基礎をどの程度理解しているかを調査し、今後の教育現場にどのように生かすことができるかを検証したい。

1. 研究の目的

本研究は、入学した学生の音楽基礎知識を調査、分析し、今後の指導に関する課題を検証することを目的とする。

2. 研究の対象と方法

本学科1年の教科としての科目である「音楽基礎」の授業の中で、音楽の基礎的な知識についての理解度を調査するために、履修者全員にアンケートを実施し、調査結果を分析する。アンケートは、授業を開始する4月と授業受講後、およそ1ヶ月後の6月初旬の2回実施し、音楽通論やピアノ実技の授業を受講した結果、どれだけ理解度がアップしているかを検証したい。まず本稿においては、第1回目のアンケート調査の分析結果を検証する。

^{*} 武蔵野大学教育学部兼任講師 [†] 武蔵野大学教育学部

3. 「音楽基礎」の授業でとったアンケート調査について

児童教育1年166名を対象に、次の内容について、アンケート調査を実施した。

(表1)

日時	アンケート内容
4月25日	①音部記号の名称と表記について ②五線上の音の名称について
5月2日	③音符・休符の名称について ④音符・休符の長さについて

(高牧 恵里)

4. アンケート調査の結果について

【1】音部記号について (分析：小佐野実穂)

(1)－Ⅰ 名称の認識について

アンケートの集計結果、音部記号の名称については表2に見られるように、それぞれ「ト音記号」、「ヘ音記号」と書かれていれば○、ひらがなで「とおんきごう」と書かれていたものは△、「トーン記号」や書いていないものは×とした。

(表2)

(名)

○ト音記号 85% (141/166)	△とおんきごう 1% (2/166)	×トーン記号、不明 14% (23/166)
○ヘ音記号 80% (133/166)	△へおんきごう 1% (2/166)	×不明 19% (31/166)

ト音記号は高音部記号、英語表記なら G clef¹、ヘ音記号は低音部記号、英語表記なら F clef²でも勿論正解だが、そのように記入した学生はいなかった。

五線上の音を絶対的な高さとして示すために音部記号が使われるが、ト音記号は1点ト音の位置を決めるしるしであることを理解していることが重要なので、「トーン」という表記は×とした。

(1)－Ⅱ 五線上への表記について

指導上の観点から、まず正しい音部記号の表記を確認する。

ト音記号は1点ト音の位置を決めるしるしで、Gの文字が模様化されて今日の様な記号になったので、これまでの作曲家の手書きの楽譜では様々な形を見ることができる。

日本で書かれるト音記号の筆順は、(図1)のように五線の第2線を1点ト音とするべく第2線のすぐ下から書き始め第3線、第1線に接するうずまき状の円弧を描き、五線の右上方に伸ばした線は中心線上の上第1線位置を頂点とすべく左方へ緩やかな逆S字のようにのびし、第4線



(図1)

上で交差して、下方下第2線位置まで降ろす。下第2線位置から左へ小さく円弧を描き、下第1線上位置で黒い玉にし、止める。

へ音記号はへの音の位置を決めるしるしで、Fの文字が模様化されて今日の様な記号になったので、ト音記号と同じように、作曲家の手書きの楽譜では様々な形を見ることができる。

へ音記号の筆順は、(図2)のように第4線をへ音とするべく第4線上に黒い玉を描き、玉の左側より第5線に接するように時計回りに円弧を描き、そのまま左下方向へ自然な曲線で第2線下位置にはらう。さらに記号の右横第4線をはさむように、第4間第3間2ヶ所に小さな黒粒点を書く。



(図2)

印刷物の流通により定められた形がフォントの規範となり、現在では、ほぼ、どの楽譜を見ても同じト音記号、へ音記号の形である。

集計では、ト音記号については、印刷楽譜と同じように書かれているものを◎、形が歪なもの、第4線で交差していないものの、第2線が1点ト音であることが確認出来るものを○、全く書けていない、位置やサイズが明らかに異なるもの、書けなかったものを×とした。

へ音記号については、印刷楽譜と同じように書かれているものを◎、はらいの長さが足りず、接点が異なるものの、第4線がへ音であることが確認出来、さらに黒粒点の位置が正しいものを○、位置やサイズが明らかに異なるもの、書けなかったものを×とした。

(表3)

(名)

◎印刷楽譜どおりの  18% (30/166)	○第2線が1点ト音 28% (46/166)	×位置やサイズが異なる・不明 54% (90/166)
◎印刷楽譜どおりの  26% (43/166)	○第4線がへ音 17% (28/166)	×位置やサイズが異なる・不明 57% (95/166)

(2) ト音記号の筆順について

学生の回答では教員が目視して書き順を確認したが、五線上の位置や形が異なっても書き順については前述の一筆式で書くことが徹底されていた。

(3) 音部記号調査のまとめ

「音部記号は音名記号の名にふさわしい」³という言葉どおり、音部記号を理解することにより、正しく楽譜を読むことができるようになることは間違いない。印刷楽譜を写し取ったかのような形にこだわることは重要ではないが、1点ト音を表すト音記号、へ音を表すへ音記号を理解し、まず正確に五線上に表記できることが読譜能力を高めるはじめての一步であろう。

【2】音名について (分析：伊坪 千恵・北谷久美子)

(1) 次の楽譜を提示し、音名について解答する。

(譜例1)



I. 全て正解83.1% 全て不正解3.6%

個別の音名の正解率(表4)

①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩
96.4%	96.4%	96.4%	96.4%	85.5%	94.6%	93.4%	95.2%	90.4%	95.8%

・ト音記号の音は、比較的理解しているようであるが、⑤が一番正解率が低い。⑨が二番目に正解率が低い。それ以外の音は、⑧から⑥のオクターブ内の音であり、ほぼ同様の正解率となっている。

II. 上記の楽譜の音をピアノで弾く。(表5)

①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩
86.2%	88%	88%	86.2%	75.9%	83.7%	84.3%	86.7%	85.5%	93.4%

・10%の学生が、音名は正解していても鍵盤上の正しい位置で弾くことができない。
 ・音名で一番正解率が低い音は、弾くことも同様に一番正解率が低い。
 ・音名は合っているが、位置をオクターブ上や下に間違えて弾いているケースもあった。

III. 与えられた五線上に音を記入する。

(譜例2) ド ミ ラ レ ソ シ ファ レ ド



(結果)(表6)

	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨
○	61.4%	65.7%	66.3%	66.3%	66.9%	65.1%	66.9%	66.3%	62.6%
△	33.1%	31.3%	30%	30.1%	30.1%	30.1%	30.1%	30.1%	31.3%
×	5.4%	3%	4.2%	3.6%	3%	4.8%	3%	3.6%	6%

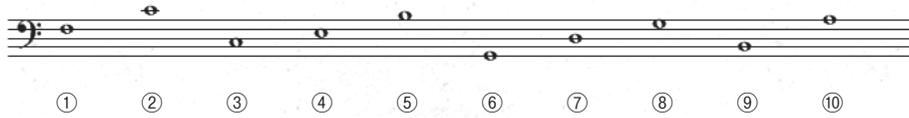
○全て正解 △場所は正解だが音符が不正解 ×場所がわからない

○ほとんど全音符の記入だが、四分音符4.2%、二分音符と八分音符は各1%

△四分音符のぼう(符尾)のない、たま(符頭)のみ、30%

(2) 次の楽譜を提示し、音名について解答する。

(譜例3)



I. 全て正解56.6% 全て不正解28.9%

個別の音の正解率 (表7)

①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩
62.7%	68.1%	64.5%	64.5%	62%	60.3%	62.7%	63.3%	62.7%	63.9%

- ・ヘ音記号はト音記号に比べて、30%ほど理解力が低い。
- ・中央のドである②が一番正解率が良い。
- ・この中では1番低い音である⑥が一番理解できていない。

II. 上記の楽譜の音をピアノで弾く。(表8)

①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩
54.2%	56%	54.8%	54.2%	52.4%	44%	51.8%	51.2%	50.6%	52.4%

- ・ト音記号と同様に、10%の学生が、音名は正解していても鍵盤上の正しい位置で弾くことができない。音名が一番わからない音は、当然のことながら一番弾けない。

III. 与えられた五線上に音を記入する。

(譜例4) ド ソ ミ ラ レ シ ファ ミ ド



(結果) (表9)

	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨
○	45.2%	41.6%	42.2%	42.2%	41%	44%	42.2%	42.2%	44%
△	22.3%	21%	21%	21%	21.7%	20%	21.1%	21.1%	22.3%
×	32.5%	37.3%	36.7%	36.7%	37.3%	35.5%	36.7%	36.7%	33.7%

- 全て正解 △場所は正解だが音符が不正解 ×場所がわからない
- △四分音符の、ぼう(符尾)のない、たま(符頭)のみ、20%
- ヘ音記号は、ト音記号に比べて、20%低い正解率である。
- △ヘ音記号は、ト音記号に比べて、10~20%低い正解率である。

【3】音符・休符の名称について（分析：櫻井佐多子）

164名の学生を対象に、音符と休符の名称について調査を行った。名称が正しく書けているものを○、数字は合っているが他の部分が間違っているものを△、全く書けていないものを×とした。

(1) 音符の名称の調査結果

(表10)

音 符	○	△	×
	67.7%	14%	18.8%
	54.9%	11%	34.1%
	57.3%	9.8%	32.9%
	61%	12.2%	26.8%
	54.9%	11.6%	33.5%
	27.4%	16.5%	56.1%

四分音符の正解が一番多いが、7割を超えておらず、全く書けていない学生も2割ちかくいた。付点の音符は半数以上が全く書けていなかった。小中学生の音楽の授業で学習しているはずだが、その後日常生活で触れていなければ記憶が曖昧になるのであろう。

(2) 休符の名称の調査結果

(表11)

休 符	○	△	×
	54.9%	7.3%	37.8%
	37.2%	3.7%	59.1%
	51.2%	8.5%	40.2%
	26.8%	3.7%	69.5%
	47.6%	9.1%	43.3%

四分音符の正解率が比較的高く出たように四分休符も一番正解率が高い。辛うじて八分休符が5割を超えて正解された。全休符と二分休符の不正解率は半数を超えている。目立った誤字は、付点の「付」を「符」と書いた学生が11名いたが、意味を考えれば間違えないはずである。四分音符の「分」を「部」と書いた学生が6名、音符の「符」を「譜」に書いた学生が4名いた。また「音ぶ」や「休ふ」、また「ふ点」など平仮名で解答された学生も多かった。休符では全休符と二分休符を取り違えた間違いも20名と多く、形が類似しているため、混乱しやすいと考えられる。付点二分音符を「三分音符」と書いたものは10名、全音符を「一分音符」と書いた学生が4名、八分休符を半休符と書いた人が3名と、わからなくても何とかその場で考えたと思われる解答も見られた。

【4】音符・休符の長さの認識について（分析：古市ゆり子）

161名の新1年生を対象に音符と休符の長さについての調査を行った。

♩ = 1を20mm×10mmの表にし、音（休）符の長さを塗りつぶす方法で八分音符と八分休符は9mm以上12mm以下、十六分音符と十六分休符は4mm以上6mm以下での記入を○とした。又、曖昧な長さや途中を飛ばして記入している場合は×とした。

(1) 音符の長さの調査結果

(表12) (/ 名)

名称	○	×
二分音符	78.3% (126/161)	21.7% (35/161)
八分音符	70.2% (113/161)	29.8% (48/161)
四分音符	90% (145/161)	10% (16/161)
全音符	76.4% (123/161)	23.6% (38/161)
付点二分音符	55.3% (89/161)	44.7% (72/161)
十六分音符	63.4% (102/161)	36.6% (59/161)

付点二分音符の不正解72名の中でも、♩ = 2.5とした解答が21名で不正解の29.2%であった。付点は、本来つけられた音符の $\frac{1}{2}$ の長さを表すが、単に0.5と記憶していることが原因と考えられる。無記入が、付点二分音符では26/72名で36.1%、十六分音符では27/59名で45.8%と他の音符より無記入が多く、認識の欠如が見られる。

(2) 休符の長さの調査結果

(表13) (/ 名)

名称	○	×
四分休符	81.4% (131/161)	18.6% (30/161)
二分休符	40.4% (65/161)	59.6% (96/161)
十六分休符	55.3% (89/161)	44.7% (72/161)
全休符	50.3% (81/161)	49.7% (80/161)
八分休符	66.5% (107/161)	33.5% (54/161)

音符と比較して休符の正解率が約10%低いことから、休符に対する意識がやや薄い傾向にある。二分休符と全休符の長さを逆に記入している間違いが二分休符不正解96名、全休符不正解80名のうち30名で、二分休符の31.3%、全休符の37.5%の不正解率である。二分休符と全休符を同じ長さとして記入している間違いも19/161名あった。全休符と二部休符は形が類似しているために、五線の第3線上に書くか、第4線下の位置の違いを認識する必要がある。

十六分休符の不正解72名中、無記入が34名おり不正解の47.2%と他の休符より無記入が多く、認識の欠如が見受けられる。

違う音符や休符にもかかわらず、同じ長さを記入している解答が23/161名あり、音符や休符

と長さの関係性を正しく認識する必要がある。

【5】第1回目のアンケートの考察について

今回のアンケートの結果から、アンケート項目に沿って、以下のように考察する。

(1) 音部記号についての考察 (分析：小佐野実穂)

音部記号の理解は、純粋な音の高さの理解のみならず、様々な楽器で用いられる音域、人の成長課程による声域の理解にも繋がっていくことが期待できる。

幼児の声域の理解から、無理なく歌唱できるよう移調が必要となること、また児童の成長期における、いわゆる“変声期”に対し、適切な対処として、無理なく発声できるよう移調譜面を用意しなければならないこともあろうかと思う。その時に適切な音部記号を用いることができることが望ましい。

協調性を育む合奏あるいは合唱においても、同じ音の高さでの一致(ユニゾン/斉唱)、または反復(カノン/輪唱)、調和(ハーモニー)を再現する時に、音部記号により音名を理解し確実に音高を再現することがアンサンブルの基本となることは間違いない。

(2) 音名についての考察 (分析：伊坪 千恵・北谷久美子)

ト音記号については、与えられた五線の範囲内の音について理解している人が多いが、1点ハ音から二点ハ音以外の音や、第5線の上にある音は理解していないケースがある。また、ヘ音記号については、ト音記号で書かれた音を判断するより理解度が下がった結果となっている。

(3) 音符休符の名称と長さについての考察 (分析：櫻井佐多子・古市ゆり子)

音(休)符の名称において、全正解者は21/164名で12.8%、全不正解は23名14%である。全正解者のうち、吹奏楽、合唱の経験者や他の楽器経験者が12名、ピアノの経験者(上級レベル)が1名、計13名が何らかの形で音楽と深く関わっていた。

音(休)符の長さでの全正解者は40/161名で24.8%、全不正解者(四分音符のみ正解含む)は15名9.3%である。全正解のうち32名80%がピアノ経験者である。ピアノ以外、吹奏楽や軽音楽での楽器経験者が26名65%であった事から、楽器経験者は音符及び休符の理解力が高いと言える。一方、ピアノ経験がソナチネ以上のレベルであっても付点二分音符の長さ、二分休符と全休符の取り間違いは数名見受けられる事から、付点二分音符と二分休符、全休符を正しく認識する事が重要である。全不正解者のうち、楽器経験の無い学生が10/15名で66.7%、ピアノ経験3年未満が3名と、楽器の経験が解答に影響を与えていると考えられる。

名称と比較して長さの正解率が1割ほど高い結果であったが、長さを認識していれば演奏可能な事に加えて、 $\cdot = 1$ として問題を出している事と、音(休)符の形やイメージから答えを導き出した事がうかがえる。

音(休)符の名称164名、音(休)符の長さ161名のうち、共に全正解である学生は15名で、名称及び長さを正しく認識している学生は全体の約1割に止まる。

特に注目すべきは吹奏楽部、合唱部に所属していた経験者がピアノ上級者よりも良い結果を残

している事である。吹奏楽や合唱は多人数で音楽の共通用語を用いなければならない、自ずと音（休）符の名称が頻繁に使用される。それに比べてピアノ経験が長い人でも、指導者によって楽典等に比較的触れられていない場合があり、基本的な知識が得られていないことがあると考えられる。

音（休）符の名称及び長さを関連付けて正確に認識する事は、楽譜を読む、また書く上で非常に重要である。上記の結果を踏まえ、これからの大学授業に於いては、特に音楽経験の少ない学生に対して、音（休）符の名称とその長さを意識させるよう指導すべきであろう。

おわりに

第1回目のアンケート調査から、学校教育における音楽の指導、またピアノ教育等における指導の偏りが見られ、音楽の基本的知識が行き渡っていない結果となっている。

本学科は、保育園、幼稚園、小学校の現場において、のちに指導者となる保育士、幼稚園教諭、小学校教諭を養成している機関であるので、学生を指導している教員もこの結果を認識し、音楽の基本的知識を正確に子どもたちに伝えられる人材を育成しなければならないと考える。

引き続き、第2回目のアンケートを基に研究を続けていきたい。

（高牧 恵里）

註

- 1 浅香 淳編、『新音楽辞典 楽語』、音楽之友社、1978年、p.399
- 2 浅香 淳編、同上書、音楽之友社、1978年、p.523
- 3 東川清一著、『だれも知らなかった楽典のはなし』、1994年、音楽之友社、p.36

主要参考文献

- 菊池有恒『楽典 音楽家を志す人のための』1995年 音楽之友社
近森一重『新訂 音楽通論』1971年 音楽之友社
www.to-on.com/bastin/.../bastien-tokyoseminar06-2014.pdf
BASTIEN PIANO PARTY BOOK B 『聴音&楽典パーティ B』1995年 東音